

その他

小児看護学領域における教授方法の工夫（第二報）

—— プレパレーション演習の授業展開 ——

野田 智子¹⁾・柴崎 由佳²⁾

For Better Teaching Methods in Pediatrics Nursing (Second Report)

—— How to Teach Nursing Skills in Preparation Practice ——

Tomoko NODA¹⁾, Yuka SHIBASAKI²⁾

キーワード：小児看護学、プレパレーション演習、授業展開

I. はじめに

子どもの権利について国際的に検討されるようになったのは1924年の「子どもの権利に関するジュネーブ宣言」からである。その後1957年の「子どもの権利宣言」を経て、1989年には「子どもの権利に関する条約」が国連で採択され、わが国は1994年に批准した。小児看護の分野においては、1988年に病院の子どもヨーロッパ協会から「病院の子ども憲章」が示され、わが国では1999年の「小児看護領域で特に留意すべき子どもの権利と必要な看護行為」によって病院における子どもの権利が示された。このような権利意識の高まりにより、子どもの権利を擁護する支援の一つとしてプレパレーションは広まってきている。しかし、2006～2007年の論文では、「プレパレーションの言葉は広まってきているものの実践には繋がっていない」と指摘されている¹⁻⁴⁾。齋藤らは、「プレパレーションという言葉は看護師長の61.1%、看護師の39.9%が認知していたが、実際にプレパレーションを実施している看護師は23.3%、病棟で実施しているとした看護師長は30.5%であった」と報告している¹⁾。さらに、「プレパレーションを実践していない理由として最も多かった回答は、看護師長は『時間や人員が足りない』、看護師は『どのように行っているかわからない』であった」と述べている¹⁾。このことから、プレパレーションの普及には看護師や看護学生がプレパレーションについて

学習する機会を提供していく必要があると考えられ、最近では臨床や教育の場におけるプレパレーションの実践報告が増えてきている⁵⁻¹²⁾。

このような背景の中、P大学においては筆者らが着任した2009年（平成21年度）からプレパレーション演習を実施しており、2012年（平成24年度）は4年目となった。本稿では、2012年（平成24年度）に実施したプレパレーション演習の授業展開を振り返り、今後の課題について検討する。

II. プレパレーションの意味

子どもは生活経験が少なく、認識発達レベルにおいても理解力に限度があるため、病気や入院によって体験する見知らぬ出来事に恐怖心や不安が増すことになる。親にとっても子どもの入院や病気は不安であり、子どもにどのように接していいのかわからない場合が多い。プレパレーションとは、「子どもがこれから直面する検査・処置などの心理的混乱に対し、心の準備をさせ、ネガティブな反応を和らげ、子どもがその事態をその子なりに乗り越えられるよう、子ども（親も）の対処能力（頑張り）を引き出すケア」と定義されている¹³⁾。プレパレーションの方法として、「情報提供」「モデリング（成功の代理体験）」「対処行動の促進」があげられ、「情報提供」の内容として①検査や手順の説明 ②子どもが体験する感覚の説明 ③子どもがと

1) 西武文理大学看護学部 2) 群馬パース大学保健科学部看護学科

るべき行動の説明 ④検査や処置の必要性の説明などがある¹⁴⁾。

Ⅲ. 小児看護学領域における演習の概要

P大学の小児看護学領域における演習の大部分は3年生対象の『小児看護学Ⅲ』で実施しているが、プレパレーション演習については2年生対象の『小児看護学Ⅱ』で実施している。以下に演習の全体概要を述べる。

1. 看護過程演習

看護過程演習は『小児看護学Ⅲ』15コマ中の5コマを充てている。1コマ目は事例を提示し、教員の指導を受けながら個人ワークにより小児看護学実習で使用する記録用紙に看護過程を展開する。2、3コマ目は個人ワークによる看護過程の展開を基にグループで検討を重ねて看護過程を展開し、4コマ目に発表する。5コマ目は発表された看護過程の展開に対し、教員が成長発達の視点、家族支援の視点、子どもの権利擁護の視点から講評を行う。

事例は乳児期、幼児期、学童期に特有の疾患を持つペーパー・ペイシェントである。平成24年度は「脳性麻痺の子どもの家族と看護過程の展開」「ファロー四徴症の子どもと家族の看護過程の展開」「白血病の子どもと家族の看護過程の展開」「ロタウイルスの子どもと家族の看護過程の展開」「喘息の子どもと家族の看護過程の展開」の5事例のペーパー・ペイシェントを取り上げた。

2. 看護技術演習

取り上げる看護技術演習の項目は、「子どもの権利を守る技術」「子どもの健康状態を知る看護技術」「検査・処置に必要な看護技術」「生活援助に必要な看護技術」

「子どもの安全を守る技術」「子どもに接近する技術」の6項目である。プレパレーション演習は「子どもの権利を守る技術」に位置づけ『小児看護学Ⅱ』で実施している。『小児看護学Ⅲ』では15コマ中の10コマを看護技術演習に充てており、このうち、臨床実習で学生が経験することの多い「子どもの健康状態を知る看護技術」のバイタルサイン測定と発育測定、「生活援助に必要な看護技術」の清拭、着脱については実技演習を行っている。これら実技演習の授業展開については群馬パース大学紀要14号¹⁵⁾で報告したので本稿では割愛する。

Ⅳ. プレパレーション演習の授業展開

1. 目 標

本学のプレパレーション演習の目標は、「①子どもの認知発達についての理解を深めることができる」「②小児の認知発達に応じたプレパレーション方法を考えることができる」「③子どもの権利についての理解を深めることができる」とした。

2. 対象・時期・時間数

対象は『小児看護学Ⅱ』を履修している学生で、平成24年度は看護学科2年生84名であった。時期は平成24年度後期の11月1日～22日の4コマであった。

3. 授業展開

プレパレーション演習の内容と方法は表1に示した。

(1) 講義

「プレパレーション」の講義は、「小児看護学における人権」「各発達段階にある子どもの病気の理解」に続いて行った。講義の流れは、プレパレーションの意味、

表1 プレパレーション演習の内容と方法

回	内 容	方法
1	「プレパレーションの意味」「プレパレーションの歴史的背景」「プレパレーションの方法」「プレパレーション計画」「プレパレーションの実際」	講義
2、3	プレパレーション計画：「実施するプレパレーションの目的」「使用するプレパレーションツールと使い方」「プレパレーションの展開方法」 プレパレーションツールの作成	グループワーク グループワーク
4	発表（発表4分 講評1分）	グループワーク

表2 プレパレーション演習のテーマ・対象年齢と発表内容

テーマ	対象年齢	発表内容
1 ベッドからの転倒転落防止のためのプレパレーション	幼児期前半	キワニスドールにしまじろうの笑顔と泣き顔を描いて、ベッドから転落するとしまじろうの顔がどうなるかを説明。
	幼児期後半	紙芝居で説明しながら、クレヨンしんちゃんの絵を張った割りばし人形をベッドのところで動かしてベッド転落の危険を説明。
3 採血検査を受けるためのプレパレーション	幼児期前半	アンパンマンの紙芝居で採血について説明し、キワニスドールを患児に見立て、布で手作りした注射器を使用し、採血の実際をみせよう。キワニスドールは笑顔と泣き顔になっており、採血が上手にできると笑顔になれると説明。
	幼児期後半	紙芝居で採血について説明し、その後、患児にキワニスドールとシリンジで遊ばせ採血の恐怖を軽減させる。
5 腰椎穿刺を受ける子どものためのプレパレーション	幼児期後半	キワニスドールで腰椎穿刺の体位を説明し、ベッドに横になった患児にキワニスドールのまねをせよ。
6 輸液療法を受けている子どものためのプレパレーション	幼児期後半	ムーミンで輸液療法を受けるときに注意することを紙芝居で説明。
7 頭部CT検査を受けるためのプレパレーション	幼児期後半	工作用紙でCTを作成し、キワニスドールを患児にみせて、CTを受ける時の注意を説明。
8 心電図検査を受けるためのプレパレーション	幼児期前半	熊の絵の紙芝居で心電図検査について説明し、その後、男の子の絵に紙で作った心電図の電極を患児に貼せよ。
	幼児期後半	女の子が心電図検査をどのように受けるのかを紙芝居で説明
10 内服が必要な子どものためのプレパレーション	幼児期後半	体の中にバイキンマンがいて、内服することによってバイキンマンを退治するという紙芝居で内服の大切さを説明。
11 バイタルサイン観察（体温・脈拍・呼吸）のためのプレパレーション	乳児期	キワニスドールで作ったアンパンマンに興味をもたせ、ぐずらないようにバイタルサイン測定を行う。
	幼児期前半	ミッフィーの紙芝居でバイタルサイン測定を説明し、その後キワニスドールと作成した体温計を患児に渡し、バイタルサイン測定の遊びをせよ、バイタルサイン測定の恐怖を軽減。
13 血圧測定が必要な子どものためのプレパレーション	幼児期前半	紙芝居で血圧測定を説明し、その後キワニスドールで作った女の子とそれに合わせて布で作成した血圧計を使用し、患児に血圧測定の遊びをせよ、血圧測定の恐怖を軽減。
14 感染防止のためのプレパレーション	幼児期後半	手洗いとマスクの必要性を紙芝居で説明。

乳児期：1歳未満 幼児期前半：1～3歳 幼児期後半：4～7歳

プレパレーションの歴史的背景、プレパレーションの方法、プレパレーション計画、プレパレーションの実際とした。プレパレーションの実際では、キワニスドール、紙芝居、プラモデルなどのプレパレーションツールに触れること、プレパレーションの実施場面をDVDで視聴することにより、学生が具体的にプレパレーションをイメージできるよう工夫した。

(2) プレパレーション計画とツール作成

はじめに1グループ6名14グループの編成を行い、リーダー、サブリーダー、発表者（ナレーター、子ども役、保護者役、看護師役）を決めた。

演習のテーマと対象とする子どもの年齢は教員が提示した(表2)。テーマは小児看護実習で体験することの多い検査・処置などから10テーマを抽出し、対象年齢は乳児期（1歳未満）、幼児期前半（1～3歳）、幼児期後半（4～6歳）としたが、具体的な年齢は各グループで決めてもらった。

学生は提示されたテーマと対象年齢から必要に応じて子どもの疾患名など子どもの状況を想定し、「実施するプレパレーションの目標」「使用するプレパレーションツールと使い方」「プレパレーションの展開方法」を計画、プレパレーションツールを作成した。

なお、プレパレーションツール作成のための教材として、筆記用具（マーカー、クーピー、色鉛筆など）、接着剤（工作用ボンド、両面テープ、のりなど）、用紙（A4の用紙、工作用画用紙、色画用紙）、その他（フェルト、色紙、お花紙、毛糸）、キワニス人形は準備し、足りないものは各グループで準備した。

(3) 発表

発表場所は学生全員が腰を下ろして発表を見渡すことのできる教室を使用した。学生が実際の病室場面をイメージできるよう、実習室の中央に小児用ベッド、床頭台、椅子などで模擬病室を設定した。発表する学生は中央の模擬病室でプレパレーションを演じ、発表



写真1 プレパレーション発表における病室設定

者以外の学生は模擬病室の周りを取り囲んで発表を視聴し講評を行った(写真1)。発表グループと発表に対して講評するグループの順番は教員が提示した。

発表する学生は「テーマ」「対象とする子どもの年齢、病名」「使用するツール」「プレパレーション実施上の留意点」を口頭で発表してから子ども役、保護者役、看護師役となりプレパレーションを演じた。1グループの発表時間は4分、発表に対する講評は1分とした。なお、発表当日の教員の講評は時間の都合上必要事項のみ述べ、詳細は、以降の『小児看護学II』の授業時間(毎日5分位)を使って順次講評を行った。

各グループのテーマ、対象年齢と発表内容の概要は表2に示した。乳児期を対象としたグループは、子どもの好きなキャラクター人形を使って患児の興味を惹きつける(気を紛らわす)内容であった。幼児期前半を対象としたグループは、はじめ紙芝居で言語的説明を行い、次に子ども自身が実際にキワニス人形を使ってごっこ遊びする(行為の再現)内容であった。幼児期後半を対象としたグループは、3グループが幼児期前半と同じく言語的説明と行為の再現を取り入れた内容、他のグループは紙芝居による言語的説明のみの内容であった。なお、例として学生が作成した「頭部CTスキャン検査」のプレパレーションツールを写真2に示した。

(4) ミニッツペーパーの提出

次回以降の演習に活かすことを目的に実技演習では学生にミニッツペーパーの提出をお願いしている。本演習でも演習終了後ミニッツペーパーを学生に配布し、プレパレーション演習で学んだこと、学べなかったこと、その他について自由記述形式で書いてもらい回収した。ただし、本演習では学生のミニッツペーパー



写真2 学生が作成したプレパレーションツールの一例 (CTスキャン)

を研究等で公表するため、以下の倫理的配慮を行った。

①ミニッツペーパーの提出は自由意思による参加であること ②参加拒否による不利益は被らないこと ③個人が特定されることはないこと ④ミニッツペーパーの提出をもって承諾が得られたものとみなすことを口頭で説明し承認を得た(群馬パース大学の研究倫理審査承認番号PAZ12-20)。

4. 学生の学び

提出された学生のミニッツペーパーの記述内容は、「プレパレーション演習での学びに関する内容」「プレパレーション演習に対する感想」に大別された。演習におけるプレパレーションの学びを明らかにするために、本稿では「プレパレーション演習での学びに関する内容」に関する記述内容を抽出して熟読し、意味内容の類似性に基づいてカテゴリー化した。その結果13のカテゴリーに分類された。最も件数の多かったカテゴリーは《言葉の選択》31件で、次いで《成長発達に応じた工夫》23件、《嘘やごまかしをしない》12件、《子ども自身が参加することの重要性》《親参加の効果》《ツールの使い方》8件、《表情や目線》7件、《個別性の考慮》と《子どものペースに合わせる》6件、《くりかえし行う》5件、《プレパレーションを行うことの意義》4件、《子どもの興味関心の惹きつけ方》3件、《褒める》2件であった。13カテゴリーの具体的な記述内容は表3の通りである。

V. プレパレーション演習の評価と今後の課題

生田らは、「対象の発達段階や疾患、家族状況などすべての背景を学生が設定し、アセスメント・問題点を

表3 プレパレーション実践の学び

カテゴリー	具体的記述内容	件数
親参加の効果	<p>親と一緒に説明すると安心して聞けると思った。</p> <p>お母さんやお父さんに紙芝居を読んでもらうことで子どもの理解が深まる。</p> <p>不安を取り除くためには両親に手伝ってもらうことも大切だと思った。</p> <p>子どもだけでなく親の協力が得られ、協力できるような対応をしていくことが大切なことだと学んだ。</p> <p>子どもの年齢が小さければ、親の協力を得て行うことが大切だと学んだ。</p> <p>プレパレーションには両親にも参加してもらった方がいいと思った。</p> <p>乳児期では親への説明も大切だと分った。</p> <p>両親とコミュニケーションをとることで子どものやる気を引き立て、恐怖心を取り除くプレパレーションが大切だと学んだ。</p>	8
成長発達に合わせた工夫	<p>幼児期前半、後半によっても伝え方が違うことが分かった。(2件)</p> <p>紙芝居だけでしっかりと伝えることのできる年齢もあれば、人形などを使うことにより伝えることのできる年齢もあると分った。</p> <p>幼児の年齢にあった説明の仕方や、話す内容を考えて伝えなくてはならないと思った。</p> <p>子どもの年齢に合わせたプレパレーションが必要だと思った。</p> <p>自分たちのプレパレーションは幼児期前半であったため、人形を使用してゆつくりと行えるよかったと思った。</p> <p>年齢によりプレパレーションの方法が変わってくるのが分かった。</p> <p>対象年齢を考えて行うことが大切だと学んだ。</p> <p>幼児期前半と後半では、子どもの理解度や集中力などが変わってくるため、年齢によって工夫する必要があると学んだ。</p> <p>発達段階を考えたプレパレーションが大切だと学んだ。</p> <p>年齢によって説明の仕方を変えることで子どもの理解も変わってくると学んだ。</p> <p>対象年齢にあった説明の方法や道具を使うことが大切だと学んだ。</p> <p>対象年齢に合わせた言葉使いや理解しやすい内容の工夫を学んだ。</p> <p>発達段階に合わせたプレパレーションを行うことが大切だと思った。(2件)</p> <p>年齢によりプレパレーションの行い方が違うことを学んだ。</p> <p>発達段階の違いにより説明の仕方が異なることが分かった。(2件)</p> <p>年齢に合わせて人形や道具などを使って説明する方法を学んだ。</p> <p>子どもの年齢や理解度に合わせて、読み方や使う物の工夫が必要なのだと分った。</p> <p>幼児の成長発達に合わせた工夫を学んだ。</p> <p>対象年齢に合わせたツールを作り工夫するということを学んだ。</p> <p>年齢に合った指導方法で話し方や親への対応を考える必要があると感じた。</p>	23
言葉の選択	<p>子どもには友達に話すような言葉だと伝わらない。</p> <p>子どもに分かるような簡単な言葉使いでしっかり説明することが大切だと思った。</p> <p>言葉使いも子どもに応じて変えることが大切だと思った。</p> <p>理解してもらえないような話し方をすることが大切だと思った。</p> <p>子どもを怖がらせないような言い回しが必要だと学んだ。</p> <p>子どもに伝えるには難しい言葉を使わない事、分りやすく伝えることがいかに重要かを学んだ。(2件)</p> <p>大人にはすぐわかる表現でも子どもには分りにくいことがあると学んだ。</p> <p>幼児の分かる言葉を使うことが大切だと学んだ。(9件)</p> <p>怖がらせないような言葉遣いの工夫が必要であると学んだ。</p> <p>簡単な言葉を使っているつもりでも、子どもにとっては分からない事もあることが分った。</p> <p>難しい言葉は使わずプレパレーションを行うことが大切だと学んだ。(2件)</p> <p>子どもの理解には言葉を簡単にする工夫が必要だと学んだ。</p> <p>小さい子どもでもわかるような言葉を選ぶことの重要性が分りました。(4件)</p> <p>子どもへの声かけや対応の仕方、説明の仕方を学べた。</p> <p>自分がかかっている言葉でも子どもにはわからない事が多いため一つ一つ説明を行うことが大切だと思った。</p> <p>表現方法も子どもが分かるように言葉をくずして表現することが必要だと思った。</p> <p>一方的に話すのではなく、幼児の理解や気持ちも聞いてあげなくてはならないと思った。</p> <p>子どもには具体的に話さなければいけないと思った。</p>	31
	<p>幼児期の子どもには紙芝居よりも人形を用いて説明を行ったほうがよい。(2件)</p> <p>幼児に説明した時にツールを使って実際に幼児自身に練習させることで理解を深めることができると学んだ。</p> <p>人形や絵本を使って難しい検査の説明を子どもに分かりやすくするための工夫を学んだ。</p>	

ツールの使い方	<p>絵で説明するよりも人形を使って説明したほうが分かりやすいと思った。</p> <p>バイタルサイン測定の際、人形を作って説明する方法が分かった。</p> <p>子どもに実際に人形を使って指導すると楽しみながら覚えられると思った。</p> <p>ぬいぐるみや紙芝居を使って説明したり、道具を使って分かりやすくするのも大切だと分った。</p>	8
興味関心を惹き付け方	<p>幼児の心をひきつけるような工夫をする必要があると思った。</p> <p>子どもの好きなキャラクターを使用することで子どもとの距離を縮め、不安の軽減ができると学んだ。</p> <p>話し方の工夫や子どもの興味を引くものを使うことで効果的なプレパレーションが行えると分った。</p>	3
表情や目線	<p>説明時子どもの目線に合わせて、表情を伺いながら説明することが大切だと学んだ。</p> <p>子どもの目線に合わせて話すことが大切であると分った。(4件)</p> <p>人形を使いながら紙芝居をするグループで、子どもの表情や応答を見ながらやっていたので、子どもの理解が深まると思った。</p> <p>目を見ながらしゃべることで信頼感が深まると思った。</p>	7
子ども自身が参加することの重要性	<p>一緒に作業をしたり参加型のほうが、楽しみながらより興味を持って理解を深めることができると思った。</p> <p>子どもの理解には言葉に出して覚えてもらったり、実際にやってもらうことも大切だと学んだ。</p> <p>子どもに説明を聞いてもらうだけでなく、一緒に検査をするシュミレーションなど練習を含みながら行えるとよい。</p> <p>人形を使うよりも実際にやってもらうとより内容を理解してもらいやすくなると思った。</p> <p>子どもに何かを教える時は子どもに実際にやらせてみたり親の協力が必要だったりたくさん工夫が必要なことが分かった。</p> <p>子どもが理解することを考え人形を使用したり実際に子どもにやらせることも大切だと学んだ。</p> <p>作った道具で見せるだけでなく、実際に本人にも遊ばせることも必要だと分った。</p> <p>人形で興味をひいたり子どもに実際に人形を使ってやってみてもらうことで理解を深めることができると学んだ。</p>	8
個別性の考慮	<p>子どもの性格もいろいろなのでその子に合ったプレパレーションを行うことが大切だと思った。</p> <p>同じ行為でも個人によって伝え方の手段が変わってしまうため適切な対応力が必要であることを学んだ。</p> <p>子どもの個性に応じて行うことが大切だと分った。</p> <p>個性のあるプレパレーションが大切。</p> <p>子どもによって理解度に個人差があるため、受け持った場合にはその子がどのくらいまで理解できるのかをコミュニケーションなどから個人差を把握しプレパレーションに活かしていくことが大切だと思った。</p> <p>実際の実習においては個性を考えたプレパレーションを行いたいと思う。</p>	6
嘘・ごまかしをしない	<p>子どもには嘘についてはいけないと学んだ。(3件)</p> <p>嘘をついたり、しっかり説明をしないのはよくない。</p> <p>嘘はつかずしっかり言ってあげることが大切だと思う。</p> <p>嘘をつかない事が大切だと学んだ。(4件)</p> <p>痛いことも嘘をつかないで伝えることが大切だと分った。</p> <p>痛いことでも伝えたほうがよいと学んだ。</p> <p>痛みや恐怖をごまかすと、看護師と子どもの信頼関係は崩れてしまうと学んだ。</p>	12
プレパレーションを行うことの意義	<p>子どもでも自分の体の状態を把握して、検査や治療等の約束事を理解することができることが分かり、その重要性を学んだ。</p> <p>プレパレーションを行うことで子どもの理解が深まり不安が軽減されると学んだ。</p> <p>不安の軽減できるため、プレパレーションによる説明が大切だと学んだ。</p> <p>子どもには理解できないから説明をやめるのではなく、方法を工夫して説明すればよいと分った。</p>	4
繰り返し行う	<p>幼児に考えさせるような質問をしたり、言葉を復唱したりしていたところが理解が深まってよいと思った。</p> <p>子どもの理解を深めるために、子どもに繰り返し言わせたりやらせてみたりする工夫を学んだ。</p> <p>子どもが理解しているか確認しながらゆっくりプレパレーションを行うと分かりやすいと思った。</p> <p>同意を得ながら行うと伝わりやすいと学んだ。</p> <p>聞いているかを確認しながら、短く伝えることが大切だと学んだ。</p>	5
子どものペースに合わせる	<p>プレパレーションの進みがはやいと理解度が低くなってしまうので子どもとの受け答えが大切だと分った。</p> <p>子どもに理解させるには話すスピードも重要になってくると分った。</p> <p>話すスピードも年齢に合わせて変えることが大切だと思った。</p> <p>ゆっくり話すと分かりやすい。(3件)</p>	6
ほめる	<p>測定後に終わったことをほめてあげることも子どもにとって重要だと学んだ。</p> <p>小さな子どもにはほめるとよいなどの接し方を学んだ。</p>	2
合 計		123

考え、実際にプレパレーションを行うためのツールを作成する。実際の場面を再現しながらプレパレーションを疑似体験する。さらに、自己評価と他者評価する。]このような演習のことをシミュレーション方式のプレパレーション演習と定義している。またその効果について、「発表といった実演体験に発表を観るといった聴覚・視覚的体験が追加することによってプレパレーション概念の真の理解を促進する」と述べている¹⁶⁾。

P大学ではプレパレーションのテーマと対象年齢は教員が提示した。しかし、学生が提示されたテーマと対象年齢から子どもと家族の状況を想定しながらプレパレーション計画を立案し、プレパレーションツールを作成するようにした。また、発表では模擬病室を設定し演じることによって学生が疑似体験できるよう工夫した。さらに、他グループの発表を視聴して評価することで聴覚的・視覚的体験ができるような授業展開を行った。このことから、P大学の演習も生田らの「シミュレーション方式の演習」に準ずる授業展開であったと考えられる。

演習における学生の発表内容を見ると、乳児期は気を紛らわすディストラクショナルな内容、幼児期前半は言語的説明のみでは理解不十分な部分を行為の再現で補う内容、幼児期後半は言語的説明による内容であり、学生は対象の発達段階に応じたツールと方法を考えていた。発表場面では、子ども役と看護師役が学生同士といった影響もあり、子どもの発達年齢には適さない言葉遣いや受け答えも見受けられた。しかし、ミニッツペーパーによる演習の学びを見ると、《成長発達に合わせた工夫》のほか、《言葉の選択》《表情や目線》《子どものペースに合わせる》《くりかえし行う》《子どもの興味関心の惹きつけ方》《子どもを褒める》など、発達段階に応じた工夫のみでなく、子どもとのやりとりの方法についても学んでいた。また、《嘘やごまかしをしない》《プレパレーションを行うことの意義》など、子どもの権利に関することも学んでいた。このことから、プレパレーション演習の目標である「目標①子どもの認知発達についての理解を深めることができる」と「目標②小児の認知発達に応じたプレパレーションの方法を考え演じることができる」はほぼ達成することができたと思われる。また「目標③子どもの権利について理解を深めることができる」についても理解を深めるきっかけにはなったと思われる。

今後の課題としては、プレパレーション演習の実施時期が挙げられる。P大学のプレパレーション演習時

期は2年生の後期に実施している。プレパレーションの定義である「子どもが病気や入院によって直面する検査・処置などの心理的混乱に対し、心の準備をさせ、その子なりに乗り越えられるようにする」には、疾患や家族状況等をアセスメント・問題点を把握したうえでプレパレーションを考える必要がある。そのためには、「健康障害を抱えた子どもと家族の看護」を学び終えた3年生で実施することが望ましい。しかし、「子どもの権利」を実現する手段としてのプレパレーションを強調するならば、現在のように「健康障害を抱えた子どもと家族の看護」を学ぶ前に実施の方が望ましいと思われる。演習の実施時期については検討を重ねていく必要があると考えられる。

IV. おわりに

毎年のものであるが、プレパレーション演習に対する学生の反応は良く、懸命に演習に取り組んでいる。この取り組みが臨床の場で生かせるよう、今後は演習後の評価のみならず、小児看護学実習後の評価、さらには卒業後の評価を行い、プレパレーション演習の効果を明らかにしていきたい。

文 献

- 1) 齋藤美紀子・高梨一彦・小倉能理子・他：プレパレーションに対する看護師の認識とその実施状況。弘前学院大学看護紀要5。2010：47-56。
- 2) 勝部奈々子・松森直美：入院している小児に対するプレパレーションの普及に関する検討—中国・四国・九州・沖縄地方の小児看護師を対象としてアンケート調査から—。日本小児看護学会誌29(5)。2006：647-654。
- 3) 蛭名美智子：わが国のプレパレーションの状況。小児看護29(5)。2006：548-554。
- 4) 桜田章子・山口道子・日沼千尋：日本の小児看護におけるプレパレーションの現状—文献検討から—。東京女子医大看護会誌2(1)。2007：45-51。
- 5) 山本静江・岡本幸恵・徳光祥子：幼児患者への紙芝居によるプレパレーションの有効性—点滴治療を行う幼児期患者へのアプローチ—。小児看護37。2006：351-353。
- 6) 古株ひろみ・流郷千幸・藤井真理子・他：小児とかわる看護師が考えるプレパレーションの実施と

- 評価。人間看護学研究5。2007：89-96.
- 7) 岡崎裕子・藤原恵美子・山下洋子・他：計画入院する子どもへのプレパレーションの効果の検討。神戸看護大学紀要12。2008：21-29.
- 8) 橋本浩子・谷 洋江：点滴・採血を受ける血液・主要疾患の子どものストレス状態とプレパレーション時の反応および処置中の行動。日本小児看護学会誌18(1)。2009：65-71.
- 9) 井出佳奈恵・平元 泉・高倉弘美：発達障害児における採血時のプレパレーションの検討。小児看護40。2009：57-59.
- 10) 高田一美・高城智圭・高城美圭・他：子どもへの病気説明に関する看護師の認識と実践。大阪看護学雑誌16(1)。2010：1-7.
- 11) 名古屋祐子・佐藤咲恵・塩飽 仁・他：骨髄移植をうける子どもに行ったプレパレーション2例の検討。日本小児看護学会誌22(1)。2013：88-94.
- 12) 今西誠子・阿南沙織：子どもの侵襲的処置からの回復過程とその支援に関する研究—プレパレーション実施事例から—。日本小児看護学会誌22(1)。2013：122-128.
- 13) 及川郁子：プレパレーションとは。病気の子どものプレパレーション。及川郁子・田代弘子編集、中央法規、東京：2007：2-9.
- 14) 谷川浩治・夏路瑞穂：医療領域における行動介入技法の諸概念—サイコロジカル・プレパレーション概念を中心に—。第6回日本医療保育学会抄録集。2002：25.
- 15) 野田智子・柴崎由佳：看護基礎教育における教授方法の工夫—小児看護学領域における演習科目の授業展開—。群馬パース大学紀要14。2012：35-41.
- 16) 生田まちよ・宮里邦子：小児看護におけるシミュレーション方式プレパレーション演習と看護学生の学び。熊本大学医学部保健学科紀要9。2013：73-81.